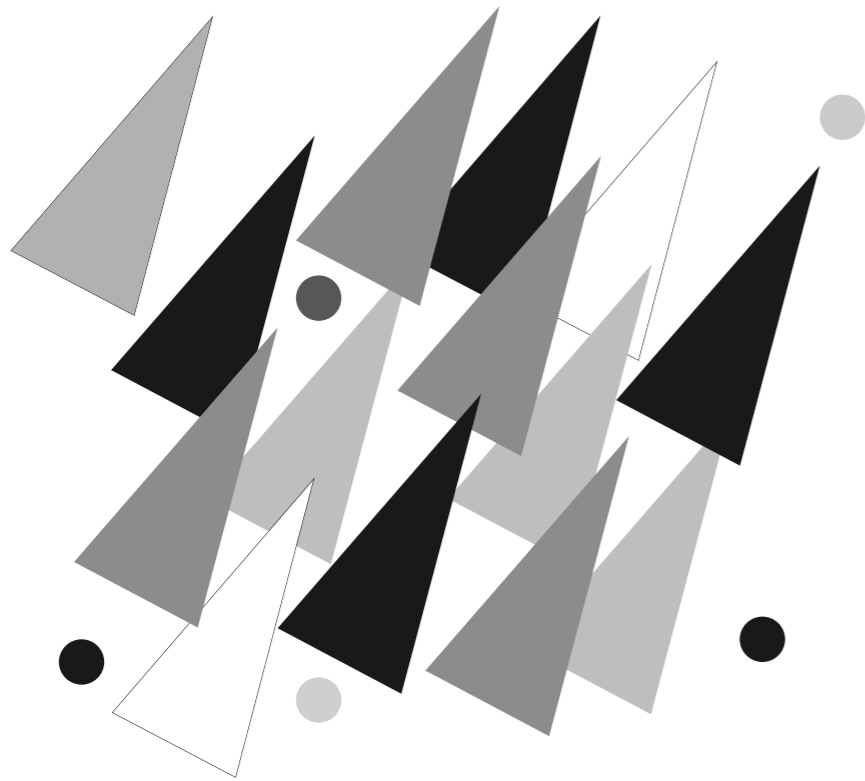

月 刊

MAROAD

Vol.173



2022.05.29

詩と評論

月刊「Maroad」

Vol.173.2022.5.29

「月刊Maroad」編集部

詩・俳句

まっちゃん	……いなだ豆乃助	6
樹木はうなずく	……にしもとめぐみ	8
十七音頭	……野口裕	9
牛舎	……中嶋康雄	10
ビー玉 (俳句)	……乾佐伎	11
名残りの雪 詠 (俳句)	……岩脇リーベル豊美	11
風の言触れ	……大橋愛由等	13
起源への／からの、瞑想の旅	……富岡和秀	14
錯覚ソネット	……大西隆志	15

ART NOTE

珈琲タイムレッスン (大人の絵画教室) ⑤	……はらだてつろう	7
-----------------------	-----------	---

連載小説

16 回目 / 「海猫堂店仕舞記」	……千田草介	4
『マルクスの場合』 - 「犬の系譜」③犬の名前	……諸井学	5

連載 評論・エッセイ

新連載 レガートな日々 <1>	……原田ひでよ	3
益田っこ通信 <95> <96>	……元正章	12
神戸詞あしび <160> 「中也帽をかぶって初夏の京洛を歩いていたその日」	……大橋愛由等	16

編集部だより★95/ウクライナ戦争は続行中である。毎日戦況が刻々と変化する。ベトナム戦争の際には、米軍がすこしずつ敗退していくさまを新聞メディアで毎日追っていた。当時のわたしは少年だったこともあり、ニュースソースは新聞・テレビ・ラジオなどのマスメディアから発信される情報に限られていた。それが今回の戦争ではSNSからの情報が多く発信され、情報の多様化・多元化が確認される。いわば情報過多のなかにあつてフェイクニュースも多く含まれることも留意する必要があるだろう。わたしの周囲には「陰謀論大好き、人間が何人かいる。彼らは表層的に流れている情報を信頼せず、裏情報を入手する能力に長けている。彼らの特質として、表層的な情報を相対化するまなざしはある程度評価するとしても、彼らが信奉する裏情報(えてして陰謀論に基づいた情報)をそのまま受容してしまい、その裏情報を相対化・検証しようとはしない。これでは表層的な情報を受容している大多数の人たちの価値観・情報力とおおきな差異は感じられない。さらに、彼ら陰謀論大好き人間たちの「反駁」姿勢から考えてみると、われわれは情報を受容する際、自分が受容したい情報を選択しようとしていることに気づく。今回のウクライナ戦争でいえば、ウクライナ側に有利な情報をより好んで蒐集し、ロシア軍の優勢な情報などは受容しようとはしないかあるいは顔を背けてしまう。いわば自分好みの「物語」を構築しようとしているのである。戦争は情報戦である。ひとつの国民や国家を動かすのは、「被害者としての物語」である。ロシア国民の多数はプーチンを支持し、今回の戦争も勝敗に関係なく「被害者としてのロシア」という民族物語を補強しつつけるだろう。／第一部の読書会は小説家で詩人の高木敏克氏のあらたに始まった「ギリシア悲劇を語る」シリーズの一回目「プロメテウス」について語ってもらいます。(大橋愛由等)

レガートな日々①

原田ひでよ

ルプー追悼

ラドウ・ルプーの訃報が飛び込んできた。秋になったら、連載にチャレンジすると決心した矢先に、今すぐ書けよ。そう言われたように感じた。ルプーのことを、いつかどうしても書きたいとおもっていたから。

ルプーのリサイタルは、2010年に一度だけ聞いた。その時のノートから、一部を転記する。

昼下がり、少し早めに到着した私たちは、下賀茂神社に足を延ばし、京都という街の懐かしさのせいか込み入った打ち明け話などしてしまいいながら、川沿いをゆつくり歩いてコンサートホールに向かった。秋の気の早い夕暮れ時、川面にはオレンジのかけらがキラキラと散っていた。

コンサート幕開けは、ヤナーチェク「霧の中」私は不勉強で譜面も持つてはいなかったが、作品もルプーのピアノも、初対面とは思えない近しさだった。

次は「アパッシヨナータ」

「この歳になって、よりにもよってアパッシヨナータ？」私は迂闊にも単純にも、そんな先入観を持っていた。ところが演奏が始まると、そ

れは聞いたこともない世にも静かなアパッシヨナータなのだった。「静かな」としか形容しようがない。テンポが格別に遅すぎるわけでもなく、フォルテをことさら弱く弾いているわけでもない。たしかに、聞きなれたあのお馴染みのアパッシヨナータのだけれど。たぶんこの年齢でようやく達し得た、こんなにも深く静かなアパッシヨナータが、ここに在る。

後半は、シューベルトのソナタ。冒頭の主題でもう胸がいっぱいになった。三楽章のスケルツォの絶妙にしてチャーミングなことと言い、耳が釘付けになって一瞬たりとも逃すことができなかった。帰り道、友人は「涙がとまらへん」と言いながらいつまでも鼻をすすっていた。私をここに誘い出し、同じ音楽を浴び共有している友が隣にいた。

ルプーの音楽は、天からまっすぐに降ってくる雪のように、私の心に落ちてきて積もっていった。それは、音のただけれど、静かでしんとしていて、やさしく心を覆いつくした。そして、なかなか消えなかった。いつまでも溶けずに白いまま、私の中のあちこちに残っていた。

これこそが音楽の本質ではないか。この静けさを自分の中に持つことが、音楽をやるということなのだ。その想いは、ルプーを聞いた日から次第に強くなるつぎりと根づいていった。

先日、短い追悼番組が放送され、N響と共演したブラームスのコンチェルト一番の3楽章を聞いた。ルプー40代のそれは、私が12年前に聞いた演奏

とは全く違っていた。もちろん、わずかに10分ほどの単一楽章を聞いただけでは手掛かりは少なすぎる。ソナタや、コンチェルトは各楽章が繋がりが合いながら完結してゆく。部分的に聞いたところで、作曲家の意図も、それを演奏者がどう汲み取って伝えようとしたかも、推察できるものではない。ただ、それにしても、そのブラームスは静謐な音楽ではなく、もつと動的なものだった。

このブラームスを弾いた40代のルプー、私が京都で聞いた60代のルプー。私は、音楽において、歳を重ねるということについて、もう一度考えた。ピアノリストだけでなく、誰しも経年と共に社会的に肉体的に、当然、精神的にも何らかの変化を余儀なくされる。私自身、果たして自分の中に、確信し志したあの静けさを持つべく過ごし、生きていくのか。

ルプーは演奏活動後半、一切のインタビュも拒否し録音も断って、生のコンサートだけに専念したという。そうやってあの静けさを築き、私たちの前に差し出したのだ。

彼は今もこれからも、私の中にひっそりと在り続け、問い続けるだろう。

(ピアノリスト)

※ラドウ・ルプー (1945.11.30-2022.4.17)

ルーマニア出身のピアノリスト)

※アパッシヨナータII ベートーヴェン・ピアノソナタ第23番「熱情」

海猫堂店仕舞記 ⑩

千田草介

中観派の祖師チャンドラキールティは漢訳で〈月称〉と書かれる。

「そういえば」私は思い出した。「ダライラマの法話をきくと『人中論』のことをよくおっしゃってるな」

「わしだけでなしに、猫主人にしても、まんざら無関係やなかったんやな、この寺は。月のゆかりだらけか」ミロクさんは私に目をむけた。「あなたにしても、〈子午線〉がらみで」「猫たちが！」と、〈ピンク〉が叫んだ。

毛を立てすぎたせいなのかどうか、十匹の猫がことごとく、それぞれの柄の球体に変じてしまっている。

「東の空に月がのぼってきたぞ」ミロクさんが言った。「これで月のそろい踏みか」

陽がまだ沈んでいないので、東の山の端にうかんだ月はチヨークで画いた丸のように白い。

「そもそもわれわれは」私は目的を忘れていた。「プラネタリウムから星を採りに来たのでは……」

「えっ」〈ピンク〉がききとがめた。「そんなこと、させませんよ」

「あれを見い」ミロクさんが月を指さした。

月からオペラハットをかぶった人が科学館東の道にとび降り、くわエタバコで、いましがた出てきた月をポケットに入れた。

(つづく)

連載
小説

◆『マルクスの場合』―「犬の系譜」③犬の名前

諸井学

連載
小説

「もう生き物の世話をしたくないから駄目だ」と祖母は言った。

「いや、ぼくが世話をする」と言い切つて、わたしは仔犬をもらつてきた。

わたしはその犬をクマと名づけた。当時の愛読書『少年』に連載されていた関谷ひさしの『愛犬クマ』からいただいた名前だ。クマは大きくなつて、漫画のクマと同じように様々事件をわたしといっしょに解決するはずだった。例えば黒猫を手先に使った宝石泥棒との立ち回りを想像して、わたしの夢は大きく膨らんだ。

ところが祖母はクマのことをチビと呼んだ。クマという名前だと教えても、「犬が熊やなんて、おかしいやないか」と言つて相手にしてくれない。

「こいつはチビやから、チビと呼ぶんや。犬の名前なんてそんなもんや」

わたしは漫画雑誌『少年』の『愛犬クマ』のページを指し示し、クマという名は全国的に有名な由緒正しい名前であると祖母に教えた。

「アホらしい」

祖母はそう言つてわたしの意見にまったく耳を貸さず、クマをチビと呼び続けた。頑固な年寄りだ。

学校へ行つてもこの犬の名前についてはややこしかった。

ケンタがクマのことをジョンと呼ぶのだ。

「おい、ジョンは元氣か？」

朝、教室でケンタに会つたら、こう挨拶してくるのだ。

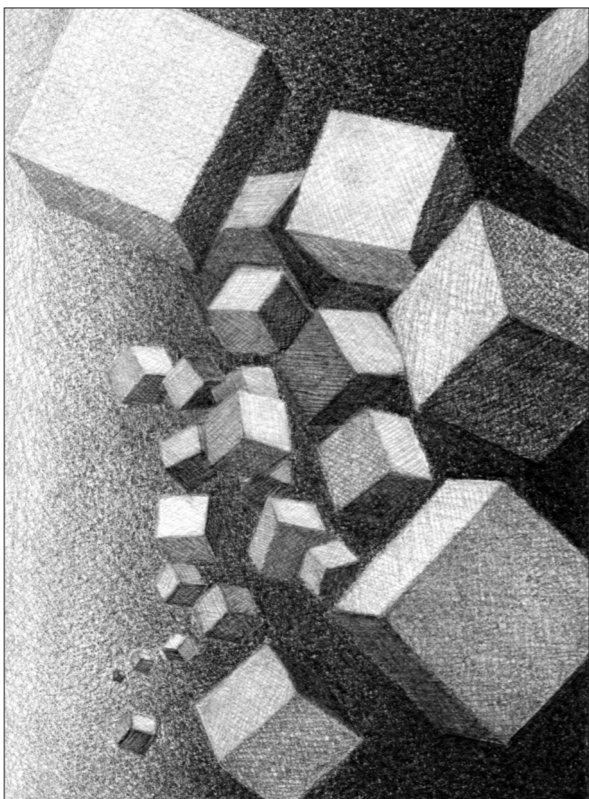
「君んちでジョンと呼ばれていた犬は、わが家に引き取られて今はクマと呼ばれているんだ」

ケンタに何度教えても、ケンタはクマという名が憶えられず、毎朝ジョンと呼ぶのだ。まったくもつてアタマの悪い野郎だった。

ジョンという名は中学生の姉がつけた名前らしい。西洋かぶれの変な女だ。アメリカへ行くと言つて、英語の歌ばかり歌つている。もらいに行つたとき、ジョンとペストとマリーがいた。先に引き取られたのはマイケルとナタリーだったという。そして親の名前がエルザ。冷や飯に残りの味噌汁をかけて食べさせ、何がエルザじゃ。何がマイケルじゃ。ちゃんちやおかしい。

一匹の犬を、わたしがクマと呼び、祖母はチビと呼び、ケンタはジョンと呼ぶ。三人が相手の意見を受け入れず、同じ犬をそれぞれ勝手に呼び合った。おかげでわたしは一匹の犬の話をするのに、頭の中で名前を変換しながら会話をしなければならない。ジョン＝クマ。クマ＝チビ。チビ＝ジョン？

(つづく)



5 珈琲タイムレッスン (大人の絵画教室)

レッスン1-4の反省

・立方体を想像の中で回転させて描けましたか？
・3個の立方体の関係性によって、動きや空間が感じられるようになったでしょうか？ それ表現の要素です。

○レッスン 1-5 立方体による表現

1 明暗・立方体・構図 (composition)

・明暗と形による表現です。形は立方体のみを使います。

・四角形の画面を設定します。

2 立方体で、魅力的な仮想空間を演出する (課題の目標)

・使う形は立方体のみ。立方体の大きさと数は自由です。

・右上、手前からの自然光を想定してください。

・配置とバランスを考える。(構図)

・背景は下が暗く上に行くに従って明るくなるグラデーション。

3 注意点 (ヒント)

・立方体を組み合わせて画面全体を秩序づける。

・四角の画面を設定することで「構図」という概念が生まれます。

・なんとなく並べるのではなく配置の仕方や、立方体を集めた形の興味深さや面白さを考え、表現を楽しみましょう。

はらだてつるう (美術家)

◆まつちん

いなだ豆乃助

まつちんって云う子がいるのであって

彼のことをわるく云うとはいないが目立ちもしないのであって

じぶんの存在をうまく消しているのである

是非その方法をご教示願えないものかと日参したのである

ところがまつちんはあくまでもまつちんであってそれ以下でもそれ以上でもないものであってまつちんはただそこにいるのであって、

◆ 樹木はうなずく

にしもとめぐみ

木が大きく揺れる
枝に葉々が重なる
風に 鳥たちに
微かにうなずく

空の青の色が
枝々から垣間見え
日暮れとともに
黄昏 たそがれて

空色の蒼々は
黒みを帯びる
ニゲラの薄青も

見上げる樹木

あなたは うなずくだけ

孤独 来い 恋

★参考に

ニゲラは風に揺れる繊細な花です。花色は白、青、紫、ピンク、花は八重も一重もあります。花の周りには糸状の苞があります。

ニゲラの呼び名はラテン語の「niger」(黒いという意味)から来ていて、クロタネソウと呼ばれている。その呼び名は多く、英語では、「Love in a mist(ラブ・イン・ア・ミスト/霧の中の恋人)」や「Devil in a bush(デビル・イン・ア・ブッシュ/茂みの中の悪魔)」があります。これらは花や姿の独特の造形から名付けられたようです。フランス語では葉の様相から「Cheveux de Vénus (ヴィーナスの髭)」と呼ばれています。愛の女神の触手に覆われる姿は、強い愛に絡めとられるイメージでしょうか。「liens de amour (愛の絆)」

ドイツ語では「Jungfer im Grünen (緑の中の処女)」です。

◆ 十七音頭

野口裕

きょうは雨だから

きてはいけない日だったかもだが

なぜか着てしまった

れいんこーとがずぶずぶと

ぬれる午後

おおきなくしゃみが飛び出して

とおん記号で始まる譜面渡して

こおりの地雷行き交う

のくたーん

おねがいます

と

がんぜなく

きぼうして

てを合わせれば

だしぬけに語りはじめる

まじめな話を混ぜかえして、ただ

るすと伝える

◆牛舎

中嶋康雄

座り続けた仏像は
 牛糞に濡れていた
 そしてだまされていた
 牛舎のある家は
 昔は温い乳を搾って出荷した
 牛飼いは死んだ
 牛飼いは死んだ
 湿ったすぎま風が吹いていた
 ぽつんと卓球台が置かれていた
 卓球台の脚はひび割れていた
 いない牛も傾いていた
 もう無い干し草を食べていた
 蛍光で極彩色
 ピンポン球を尻の穴から出していた
 よろよろしていた
 腸液で
 ピンポン球がひかった
 てらてら
 てらてら
 手当たり次第
 いやがる仏像
 押さえ込まれ

牛に交尾をせまられていた
 ふし穴の目から涙が流れていた
 涙はどす黒かった
 涙は少し喜んでもいた
 望んでもいた
 孕んだ仏像
 むやみに殺すわけにもゆかず
 決定がのびのびになっていた
 尻の毛もののびのびになっていた
 死にたての蠅が絡まっていた
 どんなこどもが喜んだだろう
 どんな野菜がとれただろう
 しなびた空気がたちこめていた
 夜になった
 真つ黒な痩せた貝が
 仏像を食べにきた
 整列するシャッターが
 整列するほど
 鋭い貝殻で
 縦に裂かれた
 逃げまどう仏像を
 わりにあわない時給で
 洗浄していた主は
 立派な葬儀をあげてもらったはずだ
 香典袋がぎばんでゆかに落ちていた
 待ちに待った給料は仮想通貨で支払われ
 嘘かどうかもわからなかった

◆ビー玉

乾佐伎

幸せはときどき怖いチューリップ
 きつとあるミモザの揺れる楽園は
 ひたむきに走っていますビー玉が
 わたくしはわたくしのもの童咲く
 一番に笑って欲しいチューリップ

◆名残りの雪 詠

岩脇リーベル豊美

雪見舞い陀羅尼の鐘を衝きならし
 Beileidsbesuch im Schnee —
 die Dharani-Glocke wurde
 angeschlagen

黒鳥着水のイメージで戦闘終えよ
 Im Image der Wasserlandung
 des Schwarzen Schwans —
 leiste Gefängnisstrafe vollständig ab

非晶質の雪上で山霊に交感す
 Das Sympathisieren
 mit den Berggeistern —
 auf dem amorphen Schnee

春嵐に名をイレニア、ゼイネプ、アントニア
 Den Frühlingsorkanen
 female Namen gegeben
 Ylenia, Zeynep, Antonia

白鳥の墓標となりし廃船櫓
 Die Ruder
 eines abgewrackten Schiffes —
 zum Grabstein eines Schwans

狩衣のハプスブルグ帝国妃
 In Jagdkleidung
 stand die
 Habsburger Prinzessin

◆益田つこ通信 95号

元正章 (日本基督教団益田教会牧師)

▼やめなさい、もう愚かなまねを

〈2022.04 半ば(パートⅧ)〉

「一の悪業によつて一の悪果を見る。その悪果故に、又新なる悪業を作る。斯の如く展転して、遂にやむときないぢや」(『二十六夜』宮沢賢治)。復活祭の日、プーチン氏がロシア正教の大聖堂の中で参列している場面が放映されていた。彼はそこで一信徒として何を祈っていたのだろうか。平和ではなく、戦争勝利を願っていたことだろう。有事にあつては、勝つことがすべて。負けることはすなわち死を意味する。それはプーチン氏に限らず、どの国の指導者も同じであろう。

あれから、もう二か月と経つ。戦況は収まる気配はなく、ウクライナ支援の最たるものが武器(兵器)であれば、ますます激しくなつて当然だ。どちらとも、もう後には引けない極限状況を呈してしまつた。

いったい何をしてここまでに至つたのか? 戦争犯罪としか言いようのない暴虐非道なシーンを目にするたびに、かくも残酷に振る舞える兵士の人間性に嘔吐してしまう。またそれを非情にも命じるプーチンという男に、怒りを超えて一の悪業を見る。悪行ではなく、これは業である。そして、止むことがない。ローマ帝国が滅んだ最大の原因は、帝国の拡大・繁栄をもたらした所業が同時に衰亡を招くものになつたと言われている。世の独裁者はなべて然り。トップにと登りつめたその才能がかえつて災いして、結局はその人の失墜を招くこと、聖書に記されている通りである。武器は破壊と死しか生まない。死の商人に利得を得させるような、そんな愚かなことは止めるべきだ。

◆益田つこ通信 96号

元正章 (日本基督教団益田教会牧師)

▼目覚めよ、信仰と希望と、そして愛

〈2022.05 半ば(パートⅨ)〉

ロシアとウクライナとは歴史的にも兄弟国である。なのに戦争しあうとは何事かといった声を耳にするが、人類最初の人殺しが、カインとアベルの兄弟殺しであつたことを聖書で知るならば、さほど驚くこともないと言えよう。いつの時代も、ねたみ、驕り、無礼、自己中心、苛立ち、恨み、不義など、およそ真実とは相容れない悪徳が影響している。とはいふものの、被災の当事者にとつてみれば、たまつたものではあるまい。いったい、ここまでに至つた経緯とは何か。

5月9日の対独戦勝記念日でのプーチン大統領の演説に今後の方針が窺えた。要は、戦争状態の延長であつて、ますます戦禍が拡大する一方である。かたやウクライナ側にとつてみれば、これまた武器調達に奔走し、徹底抗戦に臨み、停戦への方向に進みそうもない。そこで一番苦しみ、困窮するのは誰か。その「解」は言うまでもない。ここで改めて問うてみよう。「人はなぜかくも争うのか」と。戦争という名が付かなくとも、人には暴力性や残忍性が内に秘められ、争うことにおいて己が「正論」を抛り所として、相手を非難攻撃するところがある。それを「罪」と言えればいいだろう。プーチンにしてみれば、ネオ・ナチスへの戦いかもしれないが、なんとまた自分がナチズムに侵されていることを自覚しようとしなければ、プロパガンダに利用して、国民の目を欺いている。『罪と罰』の主人公のように、悔い改めて、大地に口づけしてこそ、スラブ民族主義の信仰と希望を体現するのである。愛国主義者プーチン殿 目覚めよ、愛に。

◆風の言触れ

大橋愛由等

石が

そこに

在ろうとしている

とりわけ無辜な

原因と結果を

孕んでいるようにも思え

黒の属性と赤の属性が

ひとつの平面で

独語をかさねつつ

せめぎあつているようであ

赤の属性からあらたな

属性が葉のごとく

次から次へと

はえてくるさま

そんな春の椿事が

気味がよかつたのか

風の言触れに触発され

石の脚が

屋下がりにかぎつて

西北西に向くようになる

はたまた

四角い丸が

黒の属性を変状してしまおうと

錯乱のうちにたち現れ

「アイスキャンデーが固化しないうちに」

とのつぶやきが

三つの方向から聴こえてくる

ようになつたので

石は歩きはじめるようとするのだけど

それは一なるものなので

そこに在ることがすべて

であるはずなのだが

イストワールが

折り重なるあの街

パードレたちが

欠伸を押し殺して

闊歩するあの辻を

さまよい歩きたいのか

それともつまづきたいのか

その日の月の沈黙を知りたいのか

石の口腔から出自する

六つのそれを

喰らう鳥たちが

飛来してくるそのときを

待てというなら

永遠が六つであること

精神がもうすぐ崩れようとしていること

風が雨宿りの場所を探していること

といった日常がどれほど

四角い丸であるのかを

教唆するのは

誰なのかというのは

きつと

日曜日の午後三時すぎに

生まれた属性たちのあらがいのなかに

すこしずつ

見えてくるものだろう

◆ 起源への／からの、瞑想の旅

富岡和秀

「私を無くした他人の私」が瞑想の旅に出る。その他人の私が古人類学者の背後の目になって、悠久の昔の「痕跡」へと目の想念を遡及させると、超古代の痕跡からの波動は目に見えなくとも、自己超越する者の超感覚で感ずることが可能だ。古代に占術を操る呪師は予言のシャーマンであり、呪的医師者でもあったが、古人類学への随伴者も古代の呪師めいた詩的呪師だ。

超古代の「痕跡」の波動を感じる淵源は、出アフリカの遙か前だ。七百万年前のアフリカの大地サハラに生息していたと覚しい猿人化石サヘラントロプスや、そののちの数百万年後の化石人類アウストラロピテクスの身ぶりへの想念が古人類学者の醒めた心奥に瞑想的洞察をもたらそうとする。

古人類学の探究者は化石人類を探索するサイエンスの心性を持ち、彼らに共感的に共振する詩的呪師の魂もまたポイエーシスの心性を有するのだが、二つの心性はアマルガムな一者である。古人類学探究者と詩的呪師は共感覚のポエジー心性を持つ。ポエジーなくんば真正な探究はない。古人類学の徒も詩的呪師も遍歴する魂を持つシャーマンであり、或る世界の魂であり、無意識裡に世界霊に結ばれている。

悠久の超古代夜の空洞で沈黙していた化石チャイルドが詩的呪師の想念を掻き立てる。たとえ有節言語を発声していなかったにしても、たとえ単純な身ぶり、唸り、泣き、叫びによって意思を伝えていただけであったとしても、詩的呪師の心奥の縁眼から発する透視になにか得体の知れない奇態なる親愛と寂寥の堆積がえんえんとつづくのである。じわじわと湧く遙かに遠い親愛感に累々たる痕跡群の横たわる遙かな時を超えて、ホモサピエンスサピエンスの遠祖の祖の祖にも似た超古代存在者の存在の痕跡へと湧きたつ醒めた

感情である。超古代存在者もまた死から骨の欠けらになったが、死から骨になるという肉の喪失から湧きたつ名状しがたい寂寥の痕跡は、ホモサピエンスサピエンスの死と骨と同根のものである。かくて、死への同定から湧き立つ空の觀念が詩的呪師の透視の根底で羽根車のように宿るのである。羽根車が回るなかで化石チャイルドと詩的呪師の奇態なるシンクロニシティが煙霧の彼方で交響している。

奇態なるシンクロニシティから発出し、化石チャイルドの死への同定から湧きたつ空隙が、たちどころに詩的呪師の眼の底に宿り、ありていの寂寥を遙かに突き抜けた彼方の星で「無の底」が立ち上がる。無のアヴァンギャルドに変貌する詩的呪師がさらに「無の底」を断ち割って花も世界もない空の空なる空観を現前させ、ナーガールジュナを想起するのは、詩的呪師が夢遊のなかで覚醒の頂きに達する薄明の時であるが、空の空なる空観は神秘の根拠であり、その無底の根の先端で根拠律のように世界霊のさざなみが沸き立ち、ざわざわと、そのまわりを囲繞する。

詩的呪師の瞑想の往路に浮かぶのは、化石チャイルドの頭蓋であり、手足であり、胴体や背である。そのような形態であり、超古代にもあったであろう親しき者に何かを伝えようとする所作であり、その身ぶり手ぶりだ。瞑想の復路から沸きたつのは、詩的呪師の呪であり、呪師という存在者の空漠たる空観を超えた辺りの波のまにまに漂よう「燃える」であり、空観を根拠とした神秘の火炎樹である。

呪師の内界の通り道は、超古代存在者の存在の深奥から続いている道のごとくであり、内界通路のイマージュは砂と岩の痕跡群が霧の中でつづく道なき道の波であり、超古代夜からつづく蒼空と迫害と「食べる」と生存と「死ぬ」と歓喜と水と夢の痕跡群を無限の走馬灯のように通り抜け、知と愛を「今此処」にまでもたらず。そのようにして深奥から響く音と、深奥を描く色彩画と、深奥に応答する有節言語へと立ちもどつてくる。

◆ 錯覚ソネット

大西隆志

たくさんの言葉を聞きすぎたのかしら
あらぬ方角の数字をタッチしていたようです
扉が開き誰もいない場所に立っていました
塵ひとつないように見えて、境界は塵で出来ています

青空の中から急に雨粒が落ちてくるように
わたしの一日は、よく見ることをしないでいると
怒りにとらわれてしまうことがあります
言葉は曖昧な形に崩れていきます、それも一瞬
時刻を何度も気にしていたのに、腕にはなくて
柱にも、建物の壁面にもないので、外にはないよう
ポシエットに突っ込んでいたスマホもないのです

世界がゆつくりと埃だらけの部屋にかさなっけていきます
鏡のくすみ窓ガラスにも伝染して、歪んでいる
一人の場所なんてなく、次へ進むしかないのですのか

「かのように」現代の呪師の「わたし」の詩と呪がそれを受容し、自らの呪の言語群を自らのウエルニツケ野とブローカ野に切り開こうとするだろう。有節言語の構築する伽藍は、多様な色彩と打ち震えるような音楽と、想像のもたらず形態の相乗性によって、崇高性を志向することが可能だが、それには何かしら欠けてはならないものがあるだろう。その欠落は化石チャイルドがその言語野に、うめき、わめきの短い記憶の中に浮かべたかもしれない「希求」に依拠していると、詩的呪師は内的透視の先に横たわる沈黙をもつて語り、自ら、存在の神秘開明への希求を闡明にする。

知っているだろうか？ 化石チャイルドの沈黙の声を。沈黙の呪師が自らの有節言語によって、明晰で優美に構築する神秘の伽藍を。夢幻音楽を奏でる交響曲のような伽藍の中に、燃えるような羽を持った原色の鳥が豊かな光源を潜めているのを。鳥の声が聴こえないにもかかわらず、それはこの世の最後で最期に奏でられる美しい知恵の音楽のようであるのを。詩的呪師への共感覚の沸騰とともに「沈黙」を聴くことができるなら、知ることができよう。

化石チャイルドとホモサピエンスサピエンスを想え。その奇態なるシンクロニシティを想え。超古代夜の空洞に耳を澄ませよ。新たな伝承と痕跡に耳を傾けよ。瞑想の中で超古代夜の痕跡が沈黙の声で語り出され、「今此処」の磁場まで確かに届く声を無私の耳で聴け。

数々の歴史と悲嘆と迫害をくぐり抜けた超古代からの累々とつづく痕跡群や古代伝承が瞑想の耳に届くとき、そのとき、確かに有節言語の荘嚴な伽藍の構築は実現するであろうか。無の底を打ち割って、ナーガールジュナの空の空なる空観がその根拠律になるだろうか。…なるであろう。花のない空と世界のない空の空観を突き抜けたダークマターのような場なき場に、花と世界を創出し、かくも困難なアポリアを解き放ち復活させるならば。超古代夜の空洞への／からの、閃光の道を無垢無心に持続しつづけるなら…伽藍の花火は打ちあがる。

神戸詞あしび

160-2022.05.29 大橋愛由等



京都市東山区にある「幽霊飴」=「子育飴」を売っている店

勝手に(中原)中也帽と呼んでいた。2月21日に行った第10回尹東柱追悼詩会のあとの懇親会の居酒屋に忘れていたお気に入りの帽子が中京警察署に届けられていたので、保存期間終了が間近に迫っていた5月23日京都に向かっていた。

阪急・大宮駅下車。好んで路地を歩くと、三条・四條河原町ではめったにない昼飲み店がある。この一帯は大衆的な街。神戸でいえば長田といったところか。ひとびとの生活の息遣いがストリートに街並みに反映されている。わたしは学生時代、京都市左京区に五年間住んでいたが、同じ市内でも街のモードが異なっている。

せっかく京都に来たのだから、「春の京都非公開文化財特別公開」のひとつを見学していこうと阪急と地下鉄を乗り継いで、時宗の寺(道場ともいう)金光寺(京都市下京区)に向かった。わたしは思慕する遊行の仏教者・一遍に関する絵図が公開の対象となっていた。「遊行上人縁起絵」の中の一場面。1284年京

に入った一遍とその一団が四條大橋で念仏札を配っている光景が描かれている。この寺はもともと空也ゆかりの宗旨だったが、空也を尊敬する一遍がこの地に(道場)を設え、踊り念仏を披露

したことを機縁

に時宗の寺にな

ったそうだ。ちな

みに一遍は、生

中は(非・寺院)

非・場所)を貫

たひとなので、

仰の拠点(寺)

といわず(道場)

と呼称してその

遊撃的姿勢を貫

いたのである。

ところが、金光寺の一般公開期間は終了していた。インターホン越しに確認してがっくりと肩を落とす。仕方ない。とぼとぼ歩きだす。五条大橋を渡り東山区に入る。次の目的地は六波羅蜜寺に新しく誕生した「令和館」という宝物殿である。お目当ては(空也上人立像)。現物を観るのは二度目である。口から飛び出し出している六つの小さな仏が(南無阿弥陀仏)を表している。この立像は、運慶の四男・康勝の制作。鎌倉期芸術の特徴のひとつであるリアリズム的傾向がはつきり現れている。仏像彫刻は、いくつかの作法や規範のつとつて制作されるので、仏師のリアリズム制作意欲は仏以外の仏教者に向かっていたのだろうか。

中也帽をかぶって初夏の京洛を歩いていたその日

て動くだろ、これがいんだ」と言っていた。もちろん今は嚴重なガラスケースの向こうに収納されているからそうした試みは不可能である。さらに父はこの立像のレプリカを所有したいと思いたち、寺側に交渉していたと記憶している。もちろんその願いは叶うことはなかった。いまでは精妙なフィギュアが売られている。それを亡き父の供養のために購入するかどうか迷いつづけている。

ギンギラベタバタした六波羅蜜寺を離れる。建仁寺に向かう途中、「幽霊飴」を売っている店の前に立ち止まる。夜な夜な若い女が飴屋に飴を買いに来る。不信に思った店主が後をつけるのと女は死んでいて、その傍らに赤子がいた。女は死んだあとも子を想い毎夜飴を買っていたのだ。この(幽霊飴)の話はここ京都ばかりではなく各地にあると思われ。沖繩に伝承された話に戦慄した記憶がある。発見された女の脚を縛るのだが、縛られた格好で飴を買いに来るのだ。

2022年05月29日 通巻173号
発行所/月刊「まろうど」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等
maroad66454@gmail.com
定価 660円(税込)

一誌名変更のお知らせ

ながら誌名を「月刊Mélange」としてきましたが、170号から「月刊MAROAD」に変更しました。これは、「月刊Mélange」発行当時(2005年)から17年が経過して、参加構成メンバーが入れ替わり、現在の誌友・詩友たちとの連帯を確認し、今後の表現活動の切磋琢磨を願うために変更したものです。(大橋愛由等)